

聞いてみた



山一取締役営業本部長

陣野 一人さん (38)

じんの・かずと 1979年、島原市生まれ。崇城大工学部を卒業し、熊本県内の証券会社で勤務した後、2003年に手延べそうめん製造販売「山一」に入社。商品開発部門に携わり、営業第1部長を経て、15年から取締役営業本部長を務める。

高校と商品開発する利点は？

企業と高校による共同の商品開発が盛んだ。中でも、南島原市布津町の手延べそうめん製造販売「山一」と島原市の島原農業高が開発した商品は海外でも人気を集める。山一の陣野一人取締役営業本部長(38)に連携の意義を聞いた。

(小川俊一)

発想の殻破ってくれる

山一と島原農業高は7年前から、島原名物の手延べそうめんの商品を共同開発しています。高校側が連携先を募っていた際、山一が手を挙げたのが始まりです。今月発売した新商品が既に第6弾となり、これまで国内外で累計120万食を売り上げています。

中国・香港に販路を持ち、高校生にとって手掛けた商品が世界に広がる経験は貴重だと思っています。企業にも多くの利点があります。

若者の新鮮な感性は、われわれが考えつかない発想をもたらすからです。特に若い消費者が魅力的に感じる商品は、若い人に考えてもらうのが一番。島原農とはこれまで、ホウレンソウやニンジンを練り込んだそうめんや、カボチャのスープで食べるそうめんなどを生みだし、われわれの発想の殻を破ってくれました。

人材の確保という点でも意義があります。高校生の時からビジネスの現場を知ること、その仕事に興味を持ち、就職につながる場合があります。日本では人手不足が深刻化しています。しかも島原市内の高校生は多くが卒業後に市外や県外に出ていってしまします。そんな中で、実際に島原農からはこれまで2人が山一に入社し、開発部門で働いてくれています。

17日、市役所で古川隆三郎市長に今月発売の「あごだし そうめん梅茶漬け」を紹介しました。県産のあご(トビウオ)だしで食べるそうめん、市の花のウメを添え、お湯をかけて3分で味わえます。生徒はあご梅の帽子をかぶり、場を盛り上げました。

12月20・22日には長崎市の浜屋百貨店前で新商品を販売します。初日は高校生もフースに並びます。ぜひ、われわれの努力の結晶を味わっていただきたいです。